マニラにユスト高山右近の墓（遺骸）を求めて！

カトリック手取教会（熊本）　鈴木明郎

今は亡き西本至神父にマニラで十数年前にお会いした時、「右近の墓が見つかりそうだ」と嬉しそうに話しておられたのを思い出した。H. チースリク司祭著「高山右近史話」（1996年発行）に高山右近の遺骸について、「1615年2月3日に帰天した右近の遺体は**サンタ・アンナ教会**に安置され、その後1634年にサンタ・アンナ教会から**サン・ホセ学院の聖堂**に移され、その後の行方は不明」と記されている。西本至神父、結城了悟神父、チースリク神父達は、その後の右近の墓（遺骸）の行方に強い関心を持たれてきた。

マニラ市の国際交流員であった**デ・ペドロ（DePedro）**氏は、1979年高槻市がマニラ市と姉妹都市になったことから、高山右近のことを調べることになった。その過程で、チースリク神父をも知ることになり、神父の依頼でロンドンやマドリドの文書館、ローマのイエズス会文書館で古文書を調べ、マニラにおける右近の足跡について研究することになった。彼の調査で、高山右近の遺骸について幾つかの記録が見つかり、それによると右近の遺骸はサン・ホセ学院に移されたのではなく、サンタ・アンナ教会の近くに新築された**サン・イグナシオ教会**に元管区長等の遺骨と一緒に移されたことが分かった。その後、**サン・イグナシオ教会**は太平洋戦争で破壊され地下の納骨堂も破壊されたので、遺骨が散逸するのを恐れたイエズス会は遺骨をケソン市の北にある**イエズス会の修道院**の墓地に1945年に移した。

そこで、西本神父が設立されたPEPOfficeの山本雅子氏に紹介でデ・ペドロ氏の自宅に訪ねて、お話を聞くことができた。氏は高齢で足が不自由に思えたが、親切にも車で自宅から40分ほどのケソン市の北、ノバリチェス（**Novaliches**）の**イエズス会の修道院**（**Convent of the Society of Jesus**）にある墓地まで私たちを案内して下さった。当日はマニラ沖を台風が通過した翌日だったので倒木の後片づけを横目に見て修道院に着くと、そこも倒木や折れた枝が散乱していた。墓地は、広場を囲むように遺骨を納められた柩が三段に重ねられて直径20mほどの円形状に並んでいた（旧スペイン風の円形墓地）。広場の中央に立つと生涯を神様に捧げられた聖職者の息づかいが聞こえてくるようだった。

しかし、**サン・イグナシオ教会**から移された遺骨は破壊が激しく、一人一人の遺骨を区別するのは困難であったので、二つのグループ（57名と30名）に分けて埋葬された。その一つ57人を納めた墓碑には、「**Here lie 57 men(1864-1927) unknown to men but known to God. In 1945 their remains were transferred from war-torn church San Ignacio Manila**」と記されている。30名（1864－1936）のもう一つの墓碑にも同様の文章が刻まれている。イグナシオ教会には発掘時(1945年)に167名分の遺骨があったとのことである。

イエズス会修道院の墓地

右近らの遺骸が納められたと言う墓

追放時の高山右近の様子から始めたい。右近は二回の追放と死の危機を経験している。最初のバテレン追放令「伴天連追放令（キリシタン禁教令）」は1587年に秀吉によって博多でだされた。神国である日本ではキリスト教を布教することは相応しくないとして、“領民を集団で信徒にすることの禁止、神社仏閣等の打ち壊しの禁止や宣教師の20日以内の国外退去等”が命じられた。しかし、吉利支丹の布教に関係しない外国人商人の渡来、南蛮貿易に関しては何らの規制も設けなった。

秀吉はキリシタンに対する右近の大きな影響を知っていたので、使いを出して右近に棄教を説得している。これに対して、右近は「棄教するのは出来ないので、明石の領地を即刻返上する」と答えている。この返事は秀吉には意外だったようで千利休による再度の説得を試みている。右近の再度の拒否を聞いた秀吉は彼に罪状を送り追放処分にした。しかし、大した咎めもなく1588年から1614年まで前田家の客将として金沢に滞在し小田原攻めや関ヶ原の戦いにも参加している。また、宣教師らと教会を建築したり、宣教に励んだりもしている*。

*金沢の名物「ドジョウ蒲焼き」は宣教師らが資金集めに始めたものと云われている。

一方、バテレン追放令の一原因ともなった秀吉の九州征伐時でのコエリヨ神父の政治介入（秀吉の島津攻めへの反対）やサン・フェリペ号事件（フランシスコ会士の直訴と航海士の不用意な脅し）の報告を受けた秀吉は激怒し、京都にいるフランシスコ会士とその信者の逮捕を命じた。これが長崎で処刑された26聖人の発端である。その後の秀吉による弾圧は散発的・気まぐれな感じもするが、この命令はキリシタン嫌いの大名に口実を与え各藩での信者への弾圧が行われた。

二回目の「伴天連追放令」は、将軍徳川秀忠によって1613年（慶長18年）12月にだされ、「排吉利支丹文」なる文章が日本国中に発表された。「*かの伴天連の徒党、みな件（くだん）の政令に反し、神道を嫌疑し、正法を誹謗し、義を残（そこ）なひ、善を損なふ。----*」として、教会堂に閉鎖・破壊、宣教師全員の長崎集合・追放等が行われた。また、各領主に対しては伴天連追放令が伝達された。この様に今回の弾圧は徹底的なものであった。右近も今度こそ死を覚悟したようだが、この時も追放処分となった。その理由として、右近を極刑にすることで国内にいる30万とも云われるキリシタンやキリシタン大名の反発を恐れたからだろうとも云われている。

追放令が金沢のユスト高山右近とジョアン内藤忠俊に届いたのは1614年2月15日で余裕は一日しかなかったという。高山一家8名、内藤一家9名、数人の家臣とその家族を含み百数十名の一行は1914年11月7日か,8日に長崎からマニラに逃げることになった。困難を極めた航海の後、一ヶ月後にマニラに着いた。一行は第十代スペイン総督ファン・デ・シルバをはじめ政府の代表者、教会及び各修道会の聖職者や多くのマニラ市民から大歓迎を受け、祝砲がならされたと云う。右近は国賓扱いで、イントロムロス内（**Intramuros,**スペイン人だけが居住できた城壁に囲まれた地域）に居住を許されている。他の人達は城外に住むことになった。その場所などについては後で述べることにする。

追放に伴う疲労、長旅に疲れなどから激しい熱病に冒された右近は、マニラに着いてから僅か40日後の1615年2月3日に63歳でこの世の人生を終えている（注: 死去の日につては3日、4日、5日と諸説があるようだが、チースリク神父は3日が正しいと断定している）。葬儀には総督を初め大勢の人々が参列して**サンタ・アンナ聖堂**で行われ、9日間ミサが行われたとの記録が残されている。

右近の遺骸はイントロムロス内のサンタ・アンナ聖堂本祭壇近くに納められた。ここは主に管区長達が埋葬される場所であった。この聖堂にはイエズス会のスペイン、フィリピン、アメリカの聖職者が多く埋葬され、日本人は高山右近だけであったと言われている（デ・ペロド氏の話）。1622年に近くに**サン・イグナシオ教会**（San Ignacio Church, 現在は跡だけが残されている）
が新築され、1634年に管区長達の遺骸と一緒に右近の遺骸もここに移された[注]。

同じく信仰に殉じて右近と一緒にマニラに追放されたドン・ジュアン（如安）内藤飛騨守徳庵（忠俊）、通称ジュアン内藤忠俊は1550年頃、松永長頼の子として生まれた。父長頼は丹波守護代内藤氏の名跡を継ぎ、八木城（兵庫県養父市八鹿町八木の由緒ある山城、国の史跡）の城主にもなった。右近が受洗した翌年の永禄7年（1564年）、ルイス・フロイス（またはガスパル・ヴィレラ）によりキリスト教に入信し、霊名をドン・ジュアンと云った。父を亡くした内藤ジョアンは、八木城の城主に収まったようで、八木城を中心に熱心な布教活動を行っていた。現在、記録に残っているだけで三度も日本人修道士、ロレンソ了斎（フランシスコ・ザビエルによって洗礼を受けた山口出身）を招いて布教に努めたようである。ロレンソ了斎がルイス・フロイス神父の指導の下で九州から京都にかけて獲得した信者は6千人にものぼったと言われている。
ジョアン（如安）内藤忠俊は小西行長の重臣であったが、慶長5年（1600年）9月、関ヶ原の戦いで主君の行長は敗れ斬首された。如安は同じキリシタン大名の肥前有馬晴信の手引きで平戸へ逃れ、その後1603年（慶長8年）に前田利長氏の客将となった。前田氏の居城・金沢城には同じくキリシタン武将の高山右近がおり、約十年間一緒に布教活動や教会の建設に熱心に取り組んだ。
1614年、マニラに右近らと共に徳川秀忠の「排吉利支丹文」公布（1613年末）によって追放された。しかし、彼はイントロムロス城内に住むことは許されなかったようである。ジョアン内藤忠俊は、1615年イントロムロスの近く**サン・ミゲル(San Miguel)**
に日本人キリシタン村を築き、信者達とここに住んだとされている。かくしてジュアン内藤忠俊は1626年（寛永3年）77歳で帰天した。
その記念碑が**聖ヴィンセント・デ・ポール教会（San Vincent de Paul Church）**
に建っている。サン・ミゲルがマラカニアン宮殿の近くの現在のサン・ミゲルを指すのか、内藤の終焉の地として碑が建っている現在のSan Vincent de Paul Church付近(Ermita近く)
を指すのか定かでない。もう一つの日本人キリシタン村はディラオ（**Dilao**）地区「現在のパコ(**Paco**)地区」にあった。デ・ペロド氏によると、ここにはフランシスコ会の指導のもとに日本人村が置かれていたとのことである。如安内藤はここにも住んでいたようである。パコには高山右近の記念碑と像が建っている。その碑に高山右近はこの地に最初の日本人居住地を定めたとある。しかし、高山右近はイントロムロス内に住み、重病でもあつた事からここに住んだとは思われない。

＊日本人村は当時サン・ミゲル、ディラオ地区（現パコ地区）、バレテ（**Balete？**）の３カ所にあったようだが、ディラオ地区を除いて正確な位置は把握していない。

ジュアン内藤忠俊終焉地の十字架

その記念碑の拡大図

聖ヴィンセント・デ・ポール教会（San Vincent de Paul Church）**や**アダムソン（Adamson）大学**のあるサン・マルセリーノ（San Marcelino）**通り付近は昔バレテと呼ばれていたが、右近たちキリシタン日本人がマニラに追放される以前から日本人が住んでいたと思われる。ここにはイスラム教徒、商人や海賊（船乗り？）たちがスペイン統治のもとに居住していたそうである。そのころ（1570 年頃）、日本人は僅か数十名ほどであったが、日本人を危険な民族としてスペイン人は警戒していたとのことである*。

＊戦国時代には九州・瀬戸内海方面の武士や海賊が東シナ海、フィリピン、中国、朝鮮沿岸を荒らしまわり、倭寇と恐れられていた。また、ガレイ貿易（マニラとアカプルコ）を結ぶ大帆船貿易（1565年～1815年）の進展に伴って日本人も移住した。1570年頃には数十人ほどだった日本人居住者も、17世紀の最盛期には3000人にもなったと言う。その後、鎖国によって衰退した。

注．なお、H.チースリク神父によると 1963 年４月には、ローマ聖座の公文書に基づき列福調査が始まったと記されている。1971 年には日本の信者５万 3680 名のユスト高山右近の列福を願う署名がローマに送られている。

また、1634 年にマニラで右近の公式列福調査が行われたとのモレホン神父（高山右近のマニラ追放に同行した）の証言が残されている。

パコ地区にある高山右近の像

ユスト高山右近像と青木啓神父

旧パコ駅前にある高山右近の記念碑